



馬 耳 東 風

若手研究者向けに新しい研究発表の仕組みが生まれた。「Guide dogs help us. But can we help them? (Takashi Shiga)」のタイトルで、シンボルのハーネスをつけた盲導犬が人をガイドする場面がプレゼンスライドに映し出された。東大学内最初の3MT (Three Minute Thesis) コンペティションの場面である。全学の博士課程在学中の学生から選出し、自分の博士論文の内容について英語で1枚のスライドだけを使って、一般の人向けに3分以内で説明し研究コミュニケーション能力を競うものである。大学院獣医病理学研究室 (中山裕之主任教授) に属し、「盲導犬の遺伝性疾患に関する自身の研究」について発表した。優秀な盲導犬育成のための選択的繁殖によって、イヌが発症しやすくなる病気とその遺伝的要因についての研究である。全学の若手研究者の発表の中で、獣医学研究者が見事に優勝した。2019年5月のことである。その後、プリズベンのクイーンズランド大学で行われたアジア太平洋国際大会に出場し準優勝を獲得した。研究コミュニケーション能力を競うこの大会は、2008年にオーストラリアで始まり、今では85カ国900以上の大学で開催されている。3MTは知名度と評価の高いコンペティションで、学術研究やプレゼンテーション及び研究コミュニケーション力を洗練することを目的とし専門分野外の人にも伝わる説明が求められる。毎年取り組まれるようになり、注目されている。理学部の小柴ホールが会場であることも研究者にとって縁が深い。通常の学会発表は他の研究者・専門家

と議論や意見交換を行う場であり、最近ではオンライン発表が増えており、直接顔をあわせて議論できないが気軽に参加できるようになった。質疑応答でデータ説明は直接PCから示せる便利さがある。

国内でも3MTに取り組む大学が増えてきた、3分という短い制限時間の中で発表することが求められるとともに、一般人にも受け入れられる説明でなければならない。専門分野の話というと難解な例が多いが、社会が求める核心の部分に焦点を絞る研究とのマッチングが求められる。3MTの参加は学術的なプレゼンテーションスキルだけでなく、自身の研究について専門分野の外へも伝えることも必要で、効果的な説明が求められコミュニケーションスキルの向上につながり、加えてさまざまな分野からの参加でお互いの研究を知り、リサーチカルチャーの構築ができる。参加者の顔をみながらジェスチャーを交えて自身の研究に自信を持って発表する。象牙の塔に固執することなく、俯瞰して広く社会が求める研究で、社会に還元されるものでありたい。すぐに役立たなくとも20年後、30年後あるいは遠い将来の地球社会の福祉に貢献することを期待したい。発表者の多くは、将来大学教育あるいは専門職域のリーダーとして活躍が期待される優秀な能力を備えた研究者で未来の博士である。能力と行動する力量を備えた研究者の存在する未来は明るいものと期待される。

先端科学を牽引するわが国の理研が取り組む研究成果を分かりやすく、研究者が自ら解説発表する「理研チャンネル」の動画発表が思いだされる。

(柏)